

「宇宙船に乗った」

柳 まっ茶

- A なあ  
B ん？  
A 変なこと言ってもいいか？  
B なんだよ、急に  
A いや、俺もよくわかってないんだ  
B ……どうした？  
A 笑わないでくれよ？信じなくてもいいからさ、俺もよくわかってないし  
B ああ  
A 宇宙人に会った  
B は？  
A 宇宙船に乗った。すぐ降ろされたけどな  
B いや………へえ………うん  
A 夢かもしれないけど  
B ああ、まあ、そうかもな  
A とりあえず夢の話だと思って聞いてくれ  
B (頷く)  
A 宇宙船で話をした。頭の中で声が響いているような感覚だった。  
B 奴らは、人間の“ある感情”が欲しいと俺に言ったんだ  
A 感情？  
B 奴らは、自分達の技術に満足していた。  
A いや、不満がなかった、と言った方が正しいかもしれない。  
B とにかく、奴らは俺達人間を観察し、ある事に気付いた。  
A そしてその感情こそが、人間が成長しそこに快樂を見いだしているのだと  
B だからなんだよ。その感情って……  
A “執着(欲望)”だ。奴らは、俺から執着を奪った。執着という感情を  
B なんでそんなもの。執着なんて、負の感情じゃないのか  
A 今の俺には執着心がない。おかげで生活しやすくなったよ。  
B 怒るという感情が薄れたんだ。それと同時に、快樂も薄れてしまった。  
A まるで感情がないみたいだ。  
B 考えることはできる。何が正しいのか分析もできる。生活に支障はない。  
A ただ、こなすだけ……好きなことも、楽しい時間も、少しく良くなった

B ……よくわかんねえ

A 俺もだ。生きる気持ちがあまりない。死ぬ気持ちもあまりない。

B なるようになれ状態だ

A 怖いな

B そうだな。

B ……奴らは俺から執着という感情を奪い、宇宙船から降ろす前に俺にこう言ったなんて

間

A この惑星が欲しい

少しの間

A どうして奴らは高度な技術を持ちながらも、地球を侵略しなかったか。

B 執着心がなかったからだ。でも今は違う

A で、でも。ちよつと待てよ。

A 執着心がないのに、それでいて、どうやって宇宙船を作ったり、お前を調べたり、そういった行動を成し遂げられるんだ？

B 言っただろ、生活に支障はないんだ。奴らにとって、高度な技術ではない。

A ただ考え、作り、生きる。本能に従って。

A 俺達で言う“常識、当たり前”のことだ。息をするように、とくに意味を見出すことなく、それさえも考え悩むこともない。

A が空を見上げると、Bもそれにならう。

A 無数の円盤。静かに風を切る音。コンクリートの湿ったような空気が張り詰める。

A 攻めてくるぞ

A 二人の視線が交わる。

A 今の奴らは、望み、夢、希望、目標、高みを目指し、

B 自らの欲望を埋める為に行動する。それが“当たり前”なんだ

A (声を震わせ) 酷い……

B なあ

目を細めるA。

A あれはお前達だ。そして俺だった

轟音。熱風が二人の髪を乱し、舌をざらつかせる。

A 少し、悲しいよ

終

この作品は、戯曲創作団体「戯曲本舗」に帰属する作品です。

「戯曲本舗」では、帰属作品に触れた方からご意見・ご感想を頂き、それを作品の改善・修正に役立てています。

この作品を読んだご感想、ご意見、ご質問などありましたら、是非、左記までお寄せ下さい。

[sikyoku\\_honpo@yahoo.co.jp](mailto:sikyoku_honpo@yahoo.co.jp) (戯曲本舗アドレス)

(尚、頂いたご意見やアイデアを元に修正された作品の著作権は作者に帰属されますのでご了承ください)

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

戯曲本舗・柳 まっ茶